

十一 嘉永六年一月～六月二十九日

〔表紙〕
家譜 慶永公
從嘉永六年正月
到同年六月廿九日
百九十三

〔二八五三〕
嘉永六年癸丑

一 正月朔日於御本丸年始之御規式有之

一 同日為年始御祝儀御使者を以例之通御太刀・馬代被献之

一 同月十二日佐野式部屋敷物見江被為入左義長馬御覽有之

但十四日モ同断

一 同月十五日公方様当年御本卦二付、女使を以山王御札守・干鯛一箱被献之、勇姫様も山王御札守・鮮鯛一折被献之
(十一代將軍家慶)
(慶永室)

一 正月十八日線姫君様御婚姻濟為御祝儀、御国御使者御雇御右筆内藤彦左衛門御国許被指出候趣二而、今日御用番久世大和守殿・西丸御老中内藤紀伊守殿江御聞番勝木(信親)罷出御書差出之
(家慶養女、徳川慶篤室)
(廣周)
十蔵同道
但同廿日御両所二而御返書被相渡之

一 同月廿日飯島三五左衛門流儀之弓術免状前御伝授申上之

一 同日旧臘廿一日右大將様西丸江御移徙被為濟候御飲御書、御用番(十二代將軍家定)

久世大和守殿・西丸御老中内藤紀伊守殿江御聞番罷出差出之

一 同月廿一日右同断二付御使者御聞番勝木十蔵を以右大將様江昆布一箱・塩鯛一箱・御樽代千疋被献之、西丸於蘇鉄之間御奏者番松平能登守殿家来江相渡之
(乗喬)

一 同月廿二日松栄院様為年始御祝儀御本丸江御登城、其節御伝を以御献上物且御拝領物等有之
(家齊女浅姫、十五代藩主斉承室)

一 同日日向守様御女於慎様御養女二被成、阿部伊勢守様江御縁組之儀被仰合候二付、御用番久世大和守殿江左之通届書被指出之
(糸魚川藩主松平直春)
(正弘)

同姓松平日日向守娘拙者致養女候、此段御届申候、以上
正月九日
(十七代藩主慶永)
松平越前守

一 正月廿七日文恭院様十三回御忌御法事二付、女使を以公方様・右大將様江卷松風一箱宛被献之、勇姫様も公方様江落雁一箱被献之御伺之上

一 同日右同断二付御機嫌為御伺女使被差出之
但御法事御中日并御結願御法事濟御当日被差出之

一 同日右同断二付於万福山御茶湯御執行有之

一 二月三日於東叡山右同断御法事有之ニ付、御使者御番頭代御用人
(寛永寺)
宇都宮綱太郎を以御香奠白銀五枚、勇姫様御使者御物頭中村久
藏を以御香奠白銀一枚被猷之、御本坊江相納之

一 同日孝盛院様盛姫君、家斉様御女
松平肥前守様御内室七回御忌御法事ニ付、御機嫌御伺
之御文被指出之

一 同日吉江筋江為兎狩被為人

一 二月八日東叡山文恭院様御靈前江卷煎餅一箱御猷備、東漸院江相
納之

一 同月十四日去十日寺社奉行松平豊前守殿江御聞番御呼出ニ而、小
(信義)
林仙之丞殿知行所定免書付を以御尋ニ付、御聞番勝木十藏左之
通御同所江指出之

此度御尋御座候越前国丹生郡之内、小林仙之丞様御知行
所天谷村・宿野村・下一光村・別所村・水谷村五ヶ村定
免之儀、別紙帳面之通ニ御座候、右収納金運送方之儀、
先年来頼談有之ニ付役掛り之者取次来候処、(一八四四)
弘化元辰年
先小林権大夫様御勤中五ヶ村締り方并収納取立之儀、越
前守領分同様取扱呉候様別段御頼込御座候ニ付、無抛最
寄支配郷掛り役人共江為取扱、年々豊凶ニより用捨米等

之儀、見詰を以小林家江懸合之上致治定、收納金取立運
送取斗来候、然ル処一昨(嘉永四年)亥年右取扱之儀被相断候ニ付、
其後者拘り無御座候、此段申上候、以上

二月十四日
松平越前守内
勝木十藏

但帳面不記之

一 二月十五日慎姫様阿部伊勢守様江御縁組御内約御治定相濟候、為
御祝儀御双方御祝物為御取替有之

一 同月十六日井原源兵衛流儀之極韜印可御伝授申上之

一 同月十八日慎姫様御縁組御願書、今朝助御用番松平伊賀守殿江御
(忠優)
先手石川将監殿を以御達有之

再縁
阿部伊勢守江

右之通縁組奉願候、以上

二月十八日
松平越前守取次
石川将監
阿部伊勢守取次
戸塚豊後守

一 二月十九日朝六時為大砲御覧泥原新保浦江被為人
(坂井郡)

一 同月廿九日紀伊一位様去月廿七日御逝去ニ付、御機嫌御伺之御書
(徳川治玉)

御用番阿部伊勢守殿・西丸御老中内藤紀伊守殿江御間番指出之

一同日用水出入御裁許後江筋堀割普請出来二付、公事方御勘定奉行
(聖護)
 川路左衛門尉殿江左之通御届指出之

松平越前守御預所越前国坂井郡上番村外十三ヶ村、同領

分同国同郡下番村外十九ヶ村(温純、丸岡藩主)、有馬日向守様御領分同

国同郡樋爪村外一ヶ村江相懸用水出入之儀二付、去酉年(嘉永二年)

以来及出訴御吟味相願候処、追々御利解之上分間・方位

・江筋御規定被成下、去ル(嘉永四年)亥年七月中熟談相整帰村之上

双方及示談、江筋堀割普請取掛候処度々出水二而摺取不

申、漸昨子年五月中普請出来仕候処、又候六月三日(洪)

水二相成、用水江筋下手之方走切南之方窪地江走流、用

水上り兼候二付、江縁取囲七月中江筋堀割方全普請出来

仕候、右者其砌早速御届可申上之処、江縁囲之儀二付双

方意味違之儀も有之、此節示談相整候旨国許(方)申越候間、

此段御届申候、以上

二月廿九日
松平越前守内
 大道寺七九郎

一 三月三日於御本丸西尾十左衛門高島流砲術火入調練御覽有之

一同月十三日町奉行山本源左衛門江月番御家老松平主馬左之通書付
(正方)

相渡之

今度調練場御取立二付、地平均之儀町方之者共江御手伝

被仰付候処、諸組入交り候儀故於場所組々印旗・色分手

拭等之儀者不苦段伺之通及指図候処、御時節柄不相当之

趣二相聞如何之事二候得共、右ハ全ク一時之景氣共可申

哉、乍併場処平均之儀成功果敢取候事二候得者、此度之

儀ハ別段御貪着無之候得共、就夫人気相弛ミ節儉質素相

守候從來之御趣意致忘却、華奢之儀有之候而も不苦様相

心得候而ハ不濟事二候条、以来猶以嚴重御趣意通り相守

り、民情變動不致様急度致諭告置可被申候

一 三月十四日御本丸於御馬場御目付組・御側物頭組・御先物頭組之
 者調練御覽有之

一同日見性院様、以後様付之御取扱二御改被成候段被仰出之
(松岡藩主松平昌勝)

一同月十八日公方様浜御庭江被為成候二付松栄院様御同所江被為入、
 其節御伝を以蒔絵御盃十一一箱・雲丹一升一壺・御重一組被献之

一同月十九日堂形調練場御覽、夫(方)御本丸於御馬場岡田助三郎弟子
 畑小三郎折懸御覽被成

一同月廿日左之通被仰出之

御元祖中納言様御忌月四月八日、此度思召を以町方并勝

(結城秀康)

見新町御神灯相立、御祭事致し候様被仰出候、依之御当

朝孝頭寺江御名代相濟候後、御像拝礼之儀御免被成候

一三月廿二日福井御発駕、東海道通り御旅行

一同月廿四日御用番松平伊賀守殿御呼出、御聞番罷出候処御用之

儀候間明日四時為御名代御一類中一人御登城被成候様、用人を以御書付被相渡之

一同月廿五日右同断二付為御名代日向守様御登城被成候処、於御白

書院縁頼御老中列座御用番松平伊賀守殿御縁組御願之通被仰出候旨御達有之、日向守様夫々西丸江御登城、御退出此御屋形江御

出御書院江御着座、御家老本多修理被召出被仰渡之趣被仰聞之

(敬義)

一同月廿八日慎姫様常盤橋御屋形江御引移有之、依而御用番松平伊

(福井藩上屋敷)

賀守殿江御届指出之

松平越前守養女今廿八日松平日向守御引取被申候、此段

御届申上候、以上

三月廿八日

松平越前守内

勝木十蔵

一四月四日慎姫様阿部伊勢守様江御縁組御願之通被仰出候段、御道

中岡部駅二而御承知二付而之御礼御使者御雇武部作大夫昨夕到着

(静岡県藤枝市)

之趣二而、今朝御用番牧野備前守殿・西丸御老中内藤紀伊守殿江

(忠雅)

御聞番大道寺罷出御書指出之

七九郎同道

一同月五日御旅装之儘^{九時}常盤橋御屋敷江御着、即刻御供揃二而御

過

参府、為御案内御老中御廻勤、夫々神田橋御住居江被為入

一同月七日御用番牧野備前守殿・西丸御老中内藤紀伊守殿江御逢対

御勤

一同日岡西光寺二有之柴田勝家像堂古ク損候二付、此度新規出来二

相成供養有之、依之御側物頭を以御香奠金貳百疋被供之

一同月十三日承休院様七回御忌御法事二付、公方様江御機嫌御伺之

(橋慶寿)

御文被指出之

一四月十六日御参府二付上使御老中松平和泉守殿御越、上意之趣御

(乘坐)

達有之上使御取扱右為御礼御老中御廻勤

如例

一同日紅葉山御宮江公方様・右大将様御参詣二付御子参御勤可被成

(西九北の東照宮)

(長傳)

処、御参勤御礼以前二付御勤不被成段、大目付池田筑後守殿江御届指出之

一 同月十九日六半時 御登城昨十八日御用番牧野備前守殿於 御老中連名之御奉書來 於御黒書院御參勤

之御礼被仰上、例之通御太刀・御馬銀・綿御献上、畢而被召連候

(正後)

御家来山県三郎兵衛・本多修理御目見被仰付、自分献上之御太刀
目録指上之相濟、御目見之御礼申上退去、夫御老中・若年寄中

廻勤

一 同月廿二日御老中久世大和守殿・松平和泉守殿江御逢対御勤

一 同月廿五日内藤能登守殿奥方御死去之処、勇姫様御從弟之御統二
(政義)

付御忌服被為請之

一 同月廿六日崇雲院様一橋民部卿齊位様 十七回御忌御法事二付、御内証御

機嫌為御伺御文被指出之

一 四月廿七日御老中松平伊賀守殿・阿部伊勢守殿江御逢対御勤

一 五月十五日御内証御女使を以公方様御本卦御賀之為御祝儀鮮鯛一

折被献上御伺

一 同月十八日松栄院様為年始御祝儀西丸江御登城、例之通御伝を以
御献上物且御拝領物等有之

一 同月廿四日御供連之儀二付、御老中牧野備前守殿江去二月廿五日
届書被指出候処、今日御同所二而左之通御附礼を以御指図有之

拙者勝手向從來不如意二付是迄嚴重之儉約取行、其節々

(一八四三)

御届申供連致減少、就中天保十四卯年御昨子年迄十ヶ年

之間御届申供連格外致省略儉約取行候処、其後種々物入

多趣法も相立兼候二付、猶又嚴敷儉約取行申度二付、供

(文久二年、一八六二)

連之儀来ル戊年迄十ヶ年之間是迄之通致省略候、尤年限

相満候得者家格之供連二相復シ申候、此段御聞置可被下

候、以上

二月廿五日

松平越前守

覚

駕脇十三人

内式人減

徒士十三人

但跡徒士共

内七人減

乘馬一疋

乗替馬一疋

用馬二疋

供馬一疋

内乗替馬

牽馬 相減

跡挾箱

用馬

茶弁当

右之通是迄致減少候、尤式立候節者是迄之通召連申候、

以上

御附札

承置候

一 六月五日御老中牧野備前守殿御渡之御書付、大目付堀伊豆守殿(利堅)左之通御触達有之

覚

今度浦賀表江異国船渡来二付、万々一内海江乗入候儀も難斗候間、若右様之節者芝辺より品川最寄二屋敷有之万石以上之面々者、銘々屋敷相固候心得二而罷在候様、無急度可被達置候事

一 同日御老中牧野備前守殿御呼出、御聞番有賀清右衛門罷出候処、御封物二而御渡有之

今度浦賀表江異国船渡来二付、万々一内海へ乗入候儀も難斗候間、若右様之節者内海為御警衛人数出張被仰付候儀も可有之候、此段為心得先内々口上二而申達候事
但場所之儀者其節可相達候、尤火事具着用之心得二而可有之事

一 六月七日御老中牧野備前守殿御呼出二付御聞番有賀清右衛門罷出候処、左之通御切紙を以御達有之

品川御殿山
御固被仰出

松平越前守

但今夕御同所御呼出、清右衛門罷出候処御殿山江御人数御差出之節、引続御出馬被成候様御内意被仰出候段公用人相達之、依之御用御頼御目付戸川中務少輔殿江右御固場処御引渡之儀問合候処、此儀者兼而其筋江御達二相成筈二候得共、非常之節者御場所御請取二不及、直様御出張御持場御固メ可然旨御指図有之

一 同月八日御老中牧野備前守殿御渡之御書付、大目付堀伊豆守殿左之通御廻達有之

異国船万一内海江乗入非常之場合注進有之候節者、老中(東京都中央区)の八代洲河岸火消役江相達、同処二而平日之出火二不紛早半鐘を打出し、右を惣火消屋敷二而受継、同様早半鐘打鳴し可申候、右之通火消役江相達候間、火消屋敷二而早半鐘打候ハ、諸向共御曲輪内出火之節之通相心得、登城又者持場ヲ相固候様可被致候、尤火事具着用之積可被心得候、且又右二付而者場末々迄者早半鐘行届不申候間、万石以上火之見櫓有之面々、其節二限り半鐘打ならし候様可被致候

六月

此度浦賀表江異国船渡来二付而ハ、御警衛向其外夫々御

世話も有之候得共、銘々ニも心得方可有之事ニ候、右之
通万石以上・以下之面々江可被相触候

六月

一 六月九日御老中牧野備前守殿江御聞番有賀清右衛門左之通御伺
書指出候処、即刻御書付御渡有之

大目付中様御触達ニ而者早半鐘打候得ハ、登城并持場相

固候様ニ御座候、越前守儀者固場処蒙居候得ハ、兼而御

達御座候通其以前出馬之儀御指図御座候儀哉、人数指出

候儀も程遠之場所も前以御指図御座候哉、人数繰出運ヒ

も御座候事故御内々御手前様迄相伺申候、以上

六月九日

松平越前守内

有賀清右衛門

御書付

越前守出馬之儀指懸り候儀ニも可相成間、兼而内意申

達置候間、人数出張之儀相達候ハ、直ニ出馬いたし、

其段届申聞候様可仕事

ノ

越前守出馬之儀者其節ニ至り奉書を以可相達ニ而可有

之候事

一同日於御同処左之通御達有之

松平越前守

異国船内海江乗入候由ニ付品川御殿山辺江人数可被指出
候、尤武器用意致し火事具可有着用候、且又別紙之面々
も夫々之場所被仰付候間可被得其意候

(蜂須賀齊裕)
松平阿波守

(頼胤)
松平讚岐守

(齊護)
細川越中守

(奥平昌服)
松平大膳大夫

(忠玉)
酒井雅楽頭

(鑑寛)
立花左近将監

ノ

一同日右同断御人数被指出候様被仰出候ニ付、御目付土屋十郎右衛

門兼而御備組御内調被仰付置候通、常盤橋御屋敷之内相図之早太

鼓・早拍子木打廻り、青備・白備・赤備・黒備之御人数不残(福井藩)靈岸

中屋敷島御屋敷内目印有之候場所江揃置之

但靈岸島御屋敷内江勢揃場所之目印、昼ハ色分之旗を立置、

夜ハ色分之提灯立置

右勢揃之上夫々品川御殿山辺御固場所江左之通御人数操出之(緑)

青備

御旗持人式人

御旗奉行

高屋六郎右衛門

道具持一人

太鼓持人式人

鋪 持人 式人

御番頭

宇都宮綱太郎

刀差 式人

道具持 一人

射擲煩 一

玉藥持 五人

大砲方

柳井捨藏

坪川武作

近藤新平

数賀山彦 右衛門

新海助 左衛門

植木熊太郎

沢木林 左衛門

矢崎弦十郎

連 鱗之助

召連 一人ツ、

忽礮 一

玉藥持 五人

大砲方

橋本小太郎

三浦奎 左衛門

藤沢彦兵衛

杉浦幸 右衛門

毛利又 左衛門

久世三五郎

岸田兵吉

柳本東八

本多九郎平

召連 一人ツ、

防之者 六人

鋤鉄等持 參

御旗持人 式人

御旗支配

竹島仙太郎

白備

御旗持人 式人

御旗奉行

辻 十郎 右衛門

忽礮 一

玉藥持 五人

大砲方

岸田岩三郎

島津十大夫

青木吉藏 右衛門

津田栄五郎

加賀九郎次郎

辻 浅之助

篠原八百太郎

福山金太郎

久能佐太郎

射擲碩一 召連一人ツ、

玉藥持五人

大砲方

味岡甚左衛門

奈良権大夫

牧山円助

猪子善十郎

山岡権之助

青木雄次郎

波々伯部八十八

岡本慎助

国枝藤兵衛

召連一人ツ、

防之者六人

太鼓持人式人

鏞 持人式人

御番頭

波々伯部熊蔵

御旗持人式人

御旗支配

青備・白備兼

御徒目付

岩屋源兵衛

赤備

御旗持人式人

御旗奉行

常碩一

玉藥持四人

大砲方

辻 銈太郎

乙部豊蔵

山上清蔵

斎藤鉄次郎

林 忠大夫

召連一人ツ、

足輕大将

日比彦之丞

足輕大将

加藤所左衛門

長筒組 十五人

異風筒組 五人

御番頭

酒井十之丞

鐵砲方

松田新四郎

茂呂久左衛門

出浦源八郎

小関幸吉

堀 太喜右衛門

埴原璉太郎

西川誠五郎

松田東吉郎

森山伴蔵

島崎富次郎

築田八大夫

松田鉄之助

江川常三郎

安村要助

小寺鐘三郎

田村左一郎

近藤次郎八

岩屋鉢五郎

福 一郎助

柴山半蔵
召連一人ツ、

ノ二十人

玉葉持四人

御番頭

雨森伝左衛門

刀差二人
道具持一人

鏞 持人式人

武部作大夫
召連一人

太鼓持人式人

内藤彦左衛門
召連一人

貝 持人一人

御使番
安西安太郎
召連一人

御貸馬
口付二人
飼料持一人

士大将

纏 持人式人

纏支配
士大将手人
徒式人

士大将

山県三郎兵衛
騎馬

中小姓二人
給人一人

道具持一人
草履取一人

御医師
針谷玄春

佐藤宗甫

本山城益

長尾順庵

召連四人
薬箱持二人

御帳付

南部慎平

召連一人

御長柄之者
手明十人

檢使目付助

鉄砲頭兼

長谷部甚平

刀差一人

道具持一人

御徒目付

池村半兵衛

召連一人

御旗持人二人

御旗奉行

御右筆兼

杉山源十郎

ノ

黒備

御旗持人式人

御旗奉行

渡辺利右衛門

召連一人

鉄砲方

田中又三郎

斎藤儀左衛門

長谷川文蔵

柳本久兵衛

上田作十郎

長谷川友次郎

松井常次郎

笹木謙蔵

田村鐘太郎

田中郡五郎

召連一人ッ、

玉葉持二人

小荷駄

小荷駄守

久能佐右衛門

西沢丈右衛門

村井喜右衛門

橋本清右衛門

吉村伝八郎

島津左伝太

岩屋滝五郎

村上次兵衛

吉川新右衛門

召連一人ッ、

鉄砲方

吉村武右衛門

藤井滝之助

海崎英之助

山崎権助

持田清大夫

柴山惣次郎

坂野政八

岡田兼三郎

高木要助

鶴沢八五郎

召連一人ツ、
玉葉持二人

小荷駄奉行
鉄砲頭兼

勝木十蔵

刀差一人
道具持一人

御旗持人 式人

御旗支配

斎藤市右衛門
召連一人

黄備

御旗三本持人 九人

御旗奉行

小林又兵衛

刀差一人
道具持一人

公辺御用

足輕大将兼

有賀清右衛門

刀差一人
道具持一人

御城使出役

山崎良助

大森藤吉

召連一人ツ、

長筒組十三人

異風筒組五人

玉葉持人

足輕大将

上月八郎右衛門

刀差一人
道具持一人

弓組十人
異風筒組十人

矢箱持人
玉葉持人

御徒頭

近藤雄蔵

刀差一人
道具持一人

御徒鉄砲組

古市伝太郎

川崎新次郎

甲斐半大夫

石川平七

近藤次郎八

青木源五右衛門

高木忍市

田村左一郎

吉村万助

伊藤立右衛門

柴山半蔵

水野清次郎

中野多十郎

矢野九兵衛

千田又左衛門

召連一人ツ、
玉葉持人二人

鏞 持人二人

野坂源右衛門
召連一人

太鼓持人二人

林 五右衛門
召連一人

貝 持人一人

中山十兵衛
召連一人

鉄砲方

高村岩次郎

小栗五郎大夫

長谷川源之丞

武田平右衛門

川村藤一郎

伊東安五郎

森田安兵衛

林 春斎

鷺田清嘉

川崎新次郎

召連一人ツ、
玉葉持二人

鉄砲方長

平本平学

刀差一人
道具持一人

御馬前之士

青木七郎右衛門

荒川小三郎

中村政右衛門

島津右大夫

河合五右衛門

真田五郎兵衛
召連一人ツ、

御纏持人三人

御纏奉行

横川吉十郎

刀差一人
道具持一人

御刀筒

持人

高島育蔵

同

持人

久能欽次郎

御甲冑

持人小道具之者

御小姓

浅井権十郎

波々伯部弥六

小馬印持人三人

小馬印奉行

御馬方兼

松本小平太

御馬方

町田左工馬

伊藤音之助

御馬

御小姓

井上弥一郎

雨森藤四郎

御小姓頭取
大井弥十郎

堀 連之助

本多十郎兵衛
刀差一人
道具持一人
御草履取三人

大馬印持人三人

大馬印奉行

御右筆兼

矢島七郎右衛門

同

御儒者兼

前田万吉

御鎗

御将机

御手筒

此余思召之御軍器

右持人

小道具之者八人

御小人二十九人

鉄砲士長 (雪江)

中根鞞負

刀差二人

道具持一人

鉄砲士

三寺剛右衛門

大谷孫大夫

香西敬左衛門

河合太郎大夫

稻生忠之助

柳井辰蔵

松本宗古

根津門嘉

三沢為助

島崎勘右衛門

召連一人ッ、

玉薬持一人

御七医

田代万貞

半井玄冲

高橋道順

御針

佐藤適斎

御外科

長尾謙冲

御茶瓶

御茶方

御坊主

御軍器類

御乗替馬

御口之者共

御馬廻本多十郎兵衛始

御小姓御馬方等召連人

御儒者

召連人

御帳付

永井豊助

奥御坊主十一人

檢使目付

足輕大將兼

土屋十郎右衛門

刀差二人

道具持一人

異風筒役組

式十人

用人一人

御徒目付

真木文左衛門

川崎安兵衛

召連一人ツ、

御目付預り御徒目付支配

手明十六人

但御杉形之者七人

御長柄之者九人

ノ

但右御旗本黄備之分者御出馬次第繰出ニ可相成処、致退帆

候ニ付御出馬無之

右一番・二番手之御人数不残品川馭江着到、白備・青備之下宿法

禪寺、赤備・黒備之下宿天竜寺、夫御殿山ニ陣取御出馬被成候

(松江藩主松平齐贵)

得者、御殿山五町斗後之方ニ有之候出羽守様御下屋敷御借受御

本陣ニ相成、御殿山中央ニ黄備之御旗本を備、白備_{右之方}、青備_{右之方}

赤備_{左之方}、黒備_{左之方}を前後左右ニ備、東之方品川冲江向ひ白備之

大砲方大砲式挺備置、万一異人共致上陸候得者、品川者東海道之

往還ニ而御殿山者直様衝路ニ相成候故、品川往還端妙国寺ニ赤備

之内物頭組之者四十人召連出張、同処ニ赤備之大砲方五人野戦筒

備置、品川冲海手之方異国船渡来難斗ニ付、弁天崎并獵師町ニケ

所ニ搔揚台場を築立、青備之大砲方右ニケ所ニ大砲一挺宛備置之

一同日於御殿山御陣屋士大将山県三郎兵衛左之通申渡之

陣中定

一御番士并未々迄三ツ割ニツ分宛申合、昼夜御殿山御陳屋_(陣)

張番相勤可申事

但異変有之節者天竜寺迄早注進可致事

一食事之節代り合可致支度事

一外組江要事有之罷越候節ハ、其手頭迄相断可罷越事

一陣中高声・高笑等致間敷事

一喧嘩口論致間敷事

但若心得違之者有之候得者、不論善悪双方共可為曲事

事

一都而異変之儀有之節者江戸方御固メ、御持之方江早急為

知可申事

一戰場ニ望候時者甲冑着用之事

(臨)

一面々我意不可立、頭役之指図を可受事

右之通堅相守可申事

一同日右同断ニ付御国元江早飛脚差立之

一 六月十日御老中牧野備前守殿に御呼出、御聞番罷出候処左之通御書付被相渡之

松平越前守

異国船渡来二付為御警衛人数被差出候、炎暑之節候間思召を以右人数之者江御葉被下之、御葉ハ場処江相廻し候事

御葉五苓湯五千貼御殿山江相廻ル

一 同月十一日昨日御目付中江御聞番に左之通伺書指出候処、御附札を以御差図有之

一品川宿に上陸、江戸方江行通候節差留可申哉、指留候而不聞入時者戦争に及候而宜候哉

御附札

書面之通ハ可成丈穩当に取斗、何レにも差留可申事
一 御殿山辺備場見込宜様飾り候方宜敷御座候哉、伏兵同様不目立候方に而も宜御座候哉

御附札

書面之通緊要之場所見込固々候様可被致候
一事により品川宿自焼致候而も不苦事に候哉

御附札

書面之通ハ難相成事与存候

一 総而於場処御指図之御役人有之事に候哉、固々之人数心

次第二に宜御座候哉

御附札

書面之通ハ場所為見廻御役人罷越及差図候儀も可有之候

一 異国船江戸方江乗入候節、人数之儀者矢張御殿山相固々居候而宜候哉、又者次第二陸路江戸方江附添行候事に候哉

御附札

書面之通者品川惣体持場二付同処に相固居可申候事
右心得方相伺申候、以上

六月十一日

松平越前守内
有賀清右衛門

一 同日御老中阿部伊勢守殿御勝手江、御聞番大道寺七九郎に左之通書取指出之

今度異国船渡来二付御警衛被仰付人数差出申候処、下地詰合人少に而松栄院様御附之向も御手薄に相成、万一非常御披等之節者御供連之方江誠精振向取調置候処、越前守出馬被仰付候へ者屋敷中家来共弥以残少に相成、御平常丈之儀者先御指支無御座候得共、万一之儀も御座候節者御供連之儀是迄に者格外減少仕候儀も可有御座候間、兼而御含置被下候様仕度奉存候、此段御手前様方迄御内々御物語仕置候様被申付候、以上

六月十一日

松平越前守内
大道寺七九郎

一 六月十三日今朝諸月番之面々江月番御家老本多修理左之通書付相渡之

去ル五日牧野備前守殿ハ御聞番御呼出御封物二而、此度浦賀表江異国船渡来二付、万々一内海江乗入候儀も難斗候間、若右様之節者内海御警衛之為御人数出張被仰付候儀も可有之候旨、御人数被指出候ハ、引統殿様（慶永）二も御出馬被遊候様御心得可被成旨御達有之候、御人数并御出馬之儀者追而御達有之筈之旨被仰出候、左様可被相心得候、依之時宜次第海岸一番早出・増出之内被指出筈二候、猶心得方之儀ハ掛り御用人ハ可申聞候

一 同日御老中阿部伊勢守殿・牧野備前守殿ハ御呼出、御聞番大道寺七九郎罷出候処、左之通御書付一通宛御渡有之

備前守殿二而

松平越前守

浦賀表江異国船渡来、内海為御警衛人数被指出候様相達候処、異国船及退帆候二付人数引揚候様可被致候

伊勢守殿二而

浦賀表江異国船渡来二付内海為御警衛人数被差出候処、異国船退帆いたし候間人数引揚候様相達候得共、此以後非常之儀も有之候節者猶御用之筋も可有之候条、心得として達置候事

一 同日御老中牧野備前守殿御渡之御書付、大目付柳生播磨守殿ハ左之通御触達有之（久包）

浦賀表江渡来之異国船昨十二日致退帆候間、諸事平日之通可被心得候、尤非常手当之儀ハ銘々心弛ミ之筋無之様可被致候

右之趣可被相触候

六月十三日

一 六月十四日朝御人数御引揚二相成、依之御老中牧野備前守殿江届被指出之

一 同月十五日五半時御登城昨十四日御用番松平伊賀守殿ハ御白書院於黒鷲御杉戸際御用番松平伊賀守殿御達有之、於御座之間御目見可被仰付御老中連名之御奉書来

之処少々御中暑被為在候二付、右大將様為御名代御目見被仰付候、右之通御達相濟於御座之間右大將様江御目見被仰上、其節今般御固御人数被指出候二付、一同骨折御満足二思召候段御懇之上意有之、伊賀守殿御取合有之、畢而於黒鷲御杉戸際御老中阿部伊勢守殿左之通拝領被仰付候段被仰達之

暑氣之時分二付、思召を以御菓子・御煮染被下之

相濟夫ハ西丸江御登城御札被仰上、御退出掛御老中御廻勤

一 同日右同断二付本多（副皇）内蔵助始御家老・御城代江御書被成

一 同日去ル十日晩立江戸表を被指立候早飛脚今曉到着、去ル九日異
国船内海江乗入候ニ付御人数御差出被成候様御差図ニ付、一番手
・二番手被指出候由申来、依之御国海岸御備一番手之分道中十日
振ニ而出府被仰付、今日より三日ニ割合追々福井出立

一 六月十七日去ル十三日江戸表出立之早駆飛脚今夕六時過福井江着、
右者異国船退帆いたし候ニ付、御国表を立之御人数最早不及出
府候間、何レ之駄を成とも中途を折返シ御国表江可罷帰旨、御家
老山県三郎兵衛書状を以飛脚之者江相渡、出府之面々関ヶ原を今
庄迄之間ニ而右飛脚之者江行逢、何茂御国表江引返シニ相成

但本多飛驒(成熙)・秋田八郎兵衛・出淵伝之丞・榎原幸八・高村
大吉・井原司馬助ハ直ニ出府致候事

一 同月十八日御老中阿部伊勢守殿を御呼出、御聞番罷出候処去ル十
四日被指出候御伺書江御書取を以御差図有之

今度品川御殿山御警衛被仰付候ニ付、取補理候搔揚台場
并小屋掛等、人数引揚候上取払申度奉存候、此段奉伺候、
以上

六月十四日
松平越前守内
大道寺七九郎

御書取

先其儘差置可申候、并引払候方宜候ハ、勝手次第取斗
可申候事

一 六月廿三日公方様御中暑御不例ニ付、御内証を御杉折重一組被猷
之

一 同月廿六日去ル十二日御国表御城下大火ニ付而之御届書、御用番
松平伊賀守殿江御聞番を左之通指出之

松平越前守城下京町与申所を当月十二日午刻過致出火、
西北之風強火勢相募、外曲輪大手先門一ヶ所、足羽川往
来字九十九橋并同処門、其余類焼数多御座候得共城廻者
別条無之旨申来候、委細之儀者重而書付を以可申上候得
共先御届申上候、以上

六月廿六日
松平越前守内
大道寺七九郎

一 同日水戸様ニ而峰寿院様御逝去、松栄院様御兄弟之御統ニ付定式
之御忌服被為請

一 六月廿七日右同断ニ付為御機嫌伺惣出仕ニ付両御丸江御登城

一 同日右同断ニ付公方様・右大将様江御機嫌為御伺女使被指出之、
勇姫様も御本丸江女使被差出之

一 同月廿八日右同断ニ付御朦中御機嫌為御伺、両御丸御老中江御聞
番大道寺七九郎被指出之昨廿七日御触達

一同月廿九日右同断御機嫌為御伺惣出仕二付両御丸江御登城

六月廿九日

松平越前守

一同日左之通届書被指出之

拙者城下去ル十二日京町与申所夕午刻出火、申之中刻迄

致焼失候、委細左之通二御座候

一大手門 一ヶ所

一制札所 一ヶ所

一足羽川往来字九十九橋 一ヶ所

一同処門 一ヶ所

一札所 二軒

一侍屋敷 二十軒

一町屋 六百七十一軒

一潰家 七軒

一寺 三ヶ寺

一土蔵 百十ヶ所

一時鐘所 一ヶ所

一社倉 一ヶ所

一繰舟渡場番所 一ヶ所

一蓮如堂 一ヶ所

一男女怪我無之

一牛馬怪我無之

右之通御座候、此段御届申候、以上